

東京ミッドタウン日比谷



東京ミッドタウン日比谷と、まちの賑わいの核となる日比谷ステップ広場

review

選評

三信ビルディングと日比谷三井ビルディングというふたつの名建築の建て替えを含む再開発計画であり、「これからの日比谷らしさ」を追求し、新しい日比谷の価値を創造することを目指したプロジェクトである。地下四階、地上三五階、建物高さ約一九一メートルの超高層タワーには、低層部に商業施設とシネマコンプレックス、中層部に産業支援施設とオフィスサポート施設、高層部にオフィスフロアが計画された。

日比谷は、大手町・丸の内・有楽町・銀座・霞が関・新橋等の特色あるエリアの結節点に位置しており、また日比谷公園に隣接し、歴史的に見ても鹿鳴館や帝国ホテルの発祥の地であり、建て替えられる旧ビルなどのオフィス、日生劇場

や東京宝塚劇場などに代表されるエンターテインメントといった多様なポテンシャルを有するエリアである。これら周辺エリアの結び付きを更に強め賑わいを創出するために、千代田区道を廃道して広場として付け替え、民間の公開空地等と一体となった約四、〇〇〇平方メートルの「日比谷ステップ広場」が計画され、商業空間のエントランスとなる三層吹抜けのアトリウムへと繋がり、様々なイベントで活用されている。また、地下鉄二路線を結節する日比谷アーケードは旧ビルの保存部材を使用して記憶を継承し、既存道路の歩道拡張や歩行者専用道路化により、歩行者に優しく、エリアの回遊性を高め、日比谷の情報・文化の発信拠点となっている。

外観のデザインは、かつて鹿鳴館で行われていた舞踏会で男女がダンスするイメージをデザインモチーフとして「ダンシングタワー」というコンセプトで、プリーツ状の曲線で女性的で柔らかな表情が空中に舞うデザインとなっている。また、日比谷公園との「見る／見られる」の関係づくりのため、高層部を支える長柱が特徴的な中層部には立体的な緑豊かな屋上テラスが設置され、働く人の憩いの場となると共に、日比谷公園側からも建物内のアクティビティが感じられるような呼応関係を創出している。低層部はアールデコ様式の建造物として評価の高かった「三信ビルディン



夜景



建築主より

Message from Client

三井不動産株式会社
執行役員 日比谷街づくり推進部長

齋藤宏樹 *Hiroki Saitou*

公園と街が一体となった世界に類を見ない街づくり

三井有楽町集会所跡地という三井グループとしての歴史的な背景、日比谷という街の持つ独特の品格と文化の薫り、大丸有*・銀座・霞が関・虎ノ門等周辺エリアの結節点、そして皇居や日比谷公園を望む圧倒的な眺望という高いポテンシャルを最大限に活かし、それを誰もが享受できる社会資本として整備するという目標を掲げました。その実現に向け、社内外の叡智を結集し関係者の協力を得て、道路の広場化や歩行者専用道化を実現した他、重層的なパブリックスペースや都内最大級のシネマコンプレックス等魅力的な場と仕組みを整備、日比谷でしか開催できない日比谷に相応しいイベントを日夜開催しています。

今後も未来に向けた価値創造を志向し、本賞にふさわしい街づくりを永続していきたいと思っています。

※大丸有：「大手町」「丸の内」「有楽町」の3地区のこと。それぞれの頭文字をとって「大丸有(地区・エリア)」と呼称する。



設計者より

Message from Architect

ホプキンス・アーキテクト
日本代表 シニアディレクター

星野裕明 *Hiroaki Hoshino*

日比谷の街の歴史を踏襲し、新しい街へと昇華する建築

多様な街が共存し、世界中でも唯一無二の都市である東京で、それぞれの街のコンテクストを生かした建築が、東京により大きな魅力を与えたと考えました。明治期における日本近代化の象徴、国際文化交流・発信の拠点、「鹿鳴館」のあった日比谷の歴史から、舞踏会で男女がダンスする姿をデザインモチーフとし、タワー外装はプリーツ状の曲線が空中に軽やかに舞うデザインとしました。日比谷通りに面する100尺ラインを構成する基壇部は、この場所にあった三信ビルをモチーフとしたデザイン。空中に舞うタワーと一体となり、品格のある街、日比谷の象徴的なデザインが誕生しました。新しい広場に面した外装にも曲線を用い、人々を導き入れる表情を作り、広場の賑わいを中心に日比谷を既存の街と共存した新しい街へと昇華させました。



施工者より

Message from Builder

鹿島建設株式会社
東京建築支店 建築部長

桐生雅文 *Masafumi Kiryu*

たくさんの人の関わりで実現した難易度の高い工事

当プロジェクトの周辺には、劇場、映画館、ホテルなどが隣接しており、昼夜を問わず振動・騒音には細心の配慮が必要でありました。また、当該地は非常に軟弱な地盤であるため、周辺建物や地下鉄への影響を考慮し、建築主・設計者と協議し、既存建物の地下外周部を残し、山留壁として利用することとし、その影響を最小限にとどめました。

地上階では、構造の切替え階でのトランスファー鉄骨や複雑な形状の外装カーテンウォールの製作施工管理など、非常に難易度の高い工事でありました。最盛期1日2,000人の作業員が現場に従事しましたが、労働災害をなくすために、職長会を中心に風通しの良い現場づくりを目指しました。この「東京ミッドタウン日比谷」が日比谷を活性化する核となり、多くの人に長きに渡り、満足し愛され続ける建物となることを確信しています。



1. 歴史が連なる100尺の日比谷通りファサード
2. 日比谷公園と一つになる緑
3. 劇場をモチーフとした円形アトリウム
4. 地下1階の日比谷アーケードは、かつてこの地にあった「三信ビルディング」のアーケードがモチーフ

東京ミッドタウン日比谷 計画概要	
●建築主	三井不動産(株)
●設計者	ホプキンス・アーキテクト(株)日建設計 鹿島建設(株)
●施工者	鹿島建設(株)
●所在地	東京都千代田区有楽町1-1-2
●竣工日	2018年2月1日
●敷地面積	本体：10,702㎡ 広場関連施設：1,990㎡
●建築面積	本体：8,652㎡ 広場関連施設：930㎡
●延床面積	本体：189,244㎡ 広場関連施設：3,602㎡
●階数	地上35階、地下4階、塔屋1階
●構造	鉄骨造、鉄筋コンクリート造、 鉄骨鉄筋コンクリート造

「選考委員」 赤松佳珠子・青木茂・河野晴彦

グ」の壁面イメージを踏襲し、隣接する日生劇場や丸の内に連なる一〇〇尺(三一呎)ラインに高さを揃え、品格ある外装デザインを実現した。

構造計画としては、建築用制震ダンパーとして世界初となる振動エネルギー回生システムを搭載した新世代制震オイルダンパーを開発し適用している。設備計画としては、主要な電気室・熱源機械室は六階以上の高層階に位置し、BCP対策に二重、三重の設備を施した。また、都心部での超軟弱地盤で大規模(約一畝)かつ大深度工事(約二七呎)、低層部と高層部でスパンが異なる構造切り替え階を繋ぎ合わせるトランスファー鉄骨(六〇九階)の施工計画、建物を象徴する緩やかな曲線(ドレープ)、細やかな折り目(プリーツ)のある複雑な形状の外装工事の効率化と精度確保など、施工における様々な工夫も特筆に値する。